

# A・MUSEUM

vol.76  
[2013.9.15]



ミュージアムパーク  
茨城県自然博物館



上空からみた八溝山

## 八溝山 ～茨城県最高峰の山～

茨城県最高峰の八溝山(標高1022m)に登ったことはありますか。八溝山は茨城県北西部、福島県との県境に位置しています。山頂に八溝嶺神社、中腹には坂東21番札所の日輪寺があり、信仰の山として有名です。現在は、山頂付近までの道路や山頂の展望台が整備され、気軽に楽しめる山として人気が高まっています。

旧参道入口から山頂を目指していくと、まずスギやヒノキの林を通ります。そして次第に標高が高くなると、それはミズナラとブナの天然林に変わってきます。新緑の瑞々しさや紅葉の美しさはとてもすばらしく、一見の価値があります。山登りが好きな方はもちろん、苦手な方も、ぜひ一度、八溝山に足を運んで、その美しさを鑑賞してみてください。(資料課 野堀秀明)



八溝山調査にて

第59回  
企画展

# ジオ・トラベル in いばらき

— 5億年の大地をめぐる旅 —

## GEOLOGICAL TREASURES OF IBARAKI

最近の研究によって茨城県には日本で最も古い地層があることが明らかになりました。その大地の起源は約5億年前にまでさかのぼることができます。また、数千万年前に地下深くで冷え固まったマグマのかたまりである筑波山や、かつての海底火山の断面を目の当たりにできる袋田の滝など、茨城県の有名な景勝地の地形は、その大地の成り立ちと大きくかかわっています。そして、平磯海岸の岩礁でみられるアンモナイト、五浦海岸で発見されたムカシオオホホジロザメ、常陸大宮市で最近発見された古代ゾウのステゴロフォドン、つくば市から土浦市を流れる花室川などを中心に数多く発見されているナウマンゾウなどの化石も、茨城の大地を語るうえでは欠かせないものです。

2011年には茨城県北ジオパークが日本ジオパークに公式認定されるなど、茨城県内の各地でみられる

多様な地質がもつ意義は、広く認められつつあります。

本企画展では、悠久の時をたどりながら茨城県内の各地の地質を次々とめぐっていきます。化石や岩石に残された記録をひもときながら、茨城のジオ（大地）に目を向け、その成り立ちについて考えていきましょう。（教育課 赤羽岳彦）

展示構成

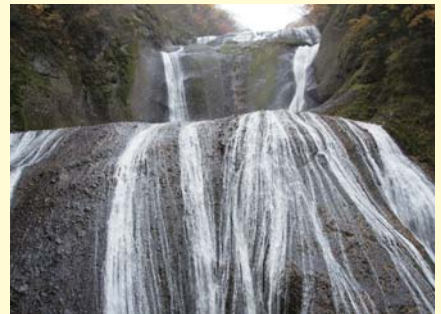
- さあ！タイムトラベル・つくば駅地下具化石群
- 阿武隈の大地は大陸のそばの海底に—古生代の茨城—
- 八溝山は大陸にくっついた深海底—ジュラ紀の茨城—
- ひたちなかはアンモナイトが栄えた海—白亜紀の茨城—
- 筑波山は地下の巨大なマグマのかたまり—中生代と新生代のはざま—
- 常磐炭田は大森林の跡—古第三紀の茨城—
- 袋田の滝は海底火山の跡—新第三紀の茨城—
- 大地を賑わすトピカルな生きものたち—新第三紀の茨城—
- 関東平野の大地に残された海水面の変動—第四紀の茨城—
- かけがえのない茨城の大地



御岩山—5億年前の地層—



筑波山—7500万年前と6000万年前のマグマ—



袋田の滝—1600万年前の海底火山—



平磯海岸で発見されたアンモナイト



五浦海岸で発見されたムカシオオホホジロザメの化石から復元された顎



常陸大宮市で発見されたステゴロフォドン頭蓋

会 期 2013年10月12日(土)～2014年1月19日(日)

10月12日は午後1時からの公開となります。

開館時間 9:30～17:00 (入館は16:30まで)

休館日 毎週月曜日

※10月14日(月), 11月4日(月), 12月23日(月),  
1月13日(月)は開館し、翌日が休館となります。  
※年末年始(12月28日(土)～1月1日(水))は休館。

●自然観察会「日本最古の地層を観察しよう」

日 時：11月4日(月・祝) 10:00～15:00

場 所：日立市(現地集合)

講 師：田切美智雄氏(日立市郷土博物館特別専門員)

対 象：中学生以上

定 員：30名(抽選)

参加費：保険料1人につき50円

●自然講座「どこまでわかったステゴロフォドン—発見とその意義—」

日 時：11月17日(日) 13:00～15:00

場 所：博物館内

講 師：安藤寿男氏(茨城大学教授), 永戸秀雄氏(産業技術総合研究所), 星加夢輝氏(元当館ジュニア学芸員)

対 象：小学生以上(小学生は保護者同伴)

定 員：280名(先着順)

●自然講座「知っていますか?? 茨城のジオパーク」

日 時：12月22日(日) 13:30～15:00

場 所：博物館内

講 師：天野一男氏(茨城大学教授)

対 象：小学4年生以上(小学生は保護者同伴)

定 員：30名(先着順)

## 展示解説員研修について

展示解説員 2

いつもとびきりの笑顔でお客様をお迎えしている展示解説員（ミュージアムコンパニオン。以下MC）。その笑顔の裏に隠された、知られざる努力の一端を今回は紹介したいと思います。

2013年6月24日から6月29日までの6日間は、館内整理期間のため臨時休館でした。さて、この臨時休館中にMCは何をしていたのでしょうか。じつは、この期間を利用して3日間の集中研修を実施していました。

1日目は「栃木県子ども総合科学館」（以下科学館）への視察研修でした。当日は、施設内の見学のほか、科学館展示解説員との交流会を設けることができました。交流会では、お子様に楽しんでいただくための工夫や、科学館展示解説員が企画運営しているサイエンスショーについての苦労話や進行のポイントなど、たくさんの貴重なアドバイスをいただくことができました。

2日目は「坂東市立岩井図書館」を会場に、専門の講師を招いての接遇（接客スキル向上）研修を行いました。勤務年数別のカリキュラムで研修を行うので、ベテランMCも気を抜くことはできません。新人MCは、あいさつなどのマナー研修や模擬ガイドツアーな

ど、基本から徹底的に学び直しました。ベテランMCは、基本の見直しを行いつつ、後輩指導についての研修など、コミュニケーションスキルの向上を目指しました。うまくいかないもどかしさと、講師からの熱いアドバイスに感極まって、たまらず涙を見せるMCも。汗と涙の1日となりました。

3日目は当館の野外施設「自然発見工房」で、研修のまとめや日々の業務についての反省会などを行いました。科学館で刺激を受けたMCからは「科学館の良かった点を参考に、アレンジして当館にも導入したい」という提案があり、その方法などを巡って活発な意見交換が行われました。また、日々の業務を効率化させるための提案が多数あり、一つ一つ確認し全員で共有することができました。

こうしてMCたちは、研修を行いながら、よりお客様に博物館を楽しんでいただけるよう日々努力しております。御来館の際、お気づきの点がございましたら、ぜひお声がけください。

最後になりましたが、通常開館中のお忙しい中、視察研修のために多くの時間をさいて御協力いただいた栃木県子ども総合科学館の皆様、この場を借りて心よりお礼を申し上げます。（管理課 丸岡良平）



童心に戻って研修中？（科学館にて）



張り詰めた空気の中での接遇研修（岩井図書館にて）

### 常盤松御用邸

常盤松御用邸は、明治時代に民有地を宮内省が買い上げ御料牧場となり、その後、幾多の変遷を経て、現在常陸宮殿下のお住まいになっています。約2haの敷地内にはコナラ、クスノキ、モミジなどの緑が多く残されており、常盤松という地名は、この地にあった松の老巨木にちなんでつけられたと言われています。またこの木には、源義経の母の常盤御前によって植えられたという伝説もありますが、他説もあり確か

なものではないようです。

近くに常盤松小学校がありますが、「盤」の脚の部首は、皿では割れやすいので石にしたとのことで、同様に町名も常盤松の字に改められています。しかし、御料地、御用邸は一貫して常盤松を用いています。

殿下は自然への御見識が高く、昆虫採集等もされ、チョウの標本が当館に展示されています。また、殿下の御依頼で、当館が常盤松の生物調査を約2年間にわたり実施しまし

### コラム by director SUGAYA

た。その報告書を楽しみにしているとの言葉がありました。



イラスト：上脇田直子（ミュージアムコンパニオン）

## ロサンゼルス郡立自然史博物館訪問について

海外調査報告 1

2013年6月7日から13日まで、当館の姉妹館であり、今年開館100周年を迎えたロサンゼルス郡立自然史博物館（以下ロス博）へ行ってきました。出張の目的はロス博の100周年記念式典に参加することと、今後の姉妹館提携事業についての協議や、来年度当館で開催予定の企画展「アイスエイジ（仮称）」を姉妹館協力展として実施するための協議および調査を行うためです。今回の訪問では、おもに滝本秀夫資料課長が姉妹館提携事業について、私がアイスエイジ展について担当しました。ここでは100周年記念式典とアイスエイジ展の調査について報告いたします。

100周年記念式典では、ロス博の関係機関の代表者や出資者など1,000人近くのゲストが招かれていました。最初に新しい野外展示「ネイチャーガーデン」を案内されました。この庭園は野外ガイドの学習テーマを意識して植栽されていますが、当館の野外施設をヒントにつくられたものだそうです。さらに「ネイチャーラボ」という野外と直結した新しい室内展示を見学しました。ここは野外で採取したものを拡大表示して解説するコーナーなど、体験型の展示が多くつくられていました。式典の最後は、野外の会場で映像と音楽からなるショーを観覧しました。ロス博の100年の歴史を振り返る内容と各関係者からのメッセージなどが流れたあと、最後にスクリーンとして使われていた布が建物から取り去られ、ガラス張りの新しい建物が現れるという演出でした。

この建物は内部で宙吊りになっているクジラの全身骨格が色彩豊かにライトアップされており、ロス博前の大通りからネイチャーガーデンとともに目に入るようになっています。

アイスエイジ展についての協議はロス博の分館であるペイジ博物館で行いました。ペイジ博物館はランチョラブリアという世界的に有名な化石産地に立地しています。ここには地下から湧き出したアスファルトの池があり、約1万年前からの動物化石が大量に発見されています。ペイジ博物館にはここで発掘された350万点以上の標本が収蔵されており、アイスエイジの動物たちの研究に多大な貢献をしています。協議はロス博の古脊椎動物研究の首席ハリス博士と、恐竜研究室の責任者キアツベ博士らと行い、企画展の趣旨や借用したい標本などについて話し合いました。その後、収蔵庫で貴重な標本を見せていただきました。また、ランチョラブリアの池やクリーニング作業のようすなどの取材を行い、アイスエイジ展に向けて貴重な映像を撮影することができました。（教育課 加藤太一）



ペイジ博物館の外観（手前のアスファルトの池にはコロンビアンモスの家族の悲劇的なジオラマがある）

### 反芻動物

皆さんは、「反芻動物」を知っていますか。反芻とは、植物を食べるウシやそのなかまのキリンやシカ、ヤギ、ヒツジ、ラクダなどが、一度飲み込んだ食べ物をもう一度口に返して噛み直す行動です。これらの動物をみていると、何も食べていないのに口をモグモグ動かしていることがあります。

なぜ反芻を行うのでしょうか。反芻動物は胃が4つあり、1番目の胃（ルーメン）にはたくさんの微生物

がいて、動物には消化できない植物繊維の主成分である「セルロース」を分解しています。反芻によって食べた植物をもう一度口に返して唾液と混ぜ、細かくすりつぶすことで微生物がセルロースを分解するはたらきを助けているのです。

反芻動物は門歯（前歯）が下顎にしか生えていないのも特徴のひとつで、上顎の硬い皮膚（ゴム状軟板）と下顎の門歯で植物を引きちぎるように食べます。この器用な食べ方に

### 小さな発見—ミュージアムコンパニオン—

も注目してみるとおもしろいですよ。  
（ミュージアムコンパニオン 大里紘子）



スポットガイド  
「食べものと体のつくりのおはなし」より

## ザンビア共和国南ルアンガア地区のライオンの状況

海外調査報告 2

2014年3月から、南および東アフリカでの野生生物とその保全をテーマとした企画展を開催します。そこで今年の7月14日～22日まで、短い期間でしたが小幡和男企画課長とともに南部アフリカのザンビア共和国を訪問して、最新の情報と資料収集を試みました。滞在したのはザンビア東部の南ルアンガア地区で、アフリカでも有数のゾウとカバの生息地です。じつはもう20年ほど前の古い話になりますが、この地で野生動物管理局（NPWS：現在は野生動物公社ZAWA）の生態調査官として2年3か月間ほど勤務し、ライオンの社会システムについて研究をした経験があります。そのため、久しぶりの里帰りともいえました。

地域一帯は、ZAWAによる広大な生態管理システム地域となっており、なかでも南ルアンガア国立公園（9,050km<sup>2</sup>）とルパンデ狩猟管理区域（4,840km<sup>2</sup>）はその中枢といえるエリアです。久しぶりのルアンガアは、驚くほど賑やかになり、小さいながらもいろいろな商店が軒を並べていました。冷凍肉や野菜なども売られており、以前は150km離れた町まで未舗装の道でこぼこ道を往復したことが嘘のようでした。

一番に気になっていたライオンたちは、その末裔たちが幸いなことにまだ健在で、昔の調査地で、バッ

ファローを仕留めた群れを観察することができました。またこれらのライオンたちは、アメリカ人のマシュー・ベッカー博士のほか、数人のザンビア人大学院生たちが参加する、ZAWAとの協働で2009年より開始された食肉類研究プロジェクト（Zambian Carnivore Programme）により、きちんと追跡調査されていました。ただし、ベッカー博士によると、私の調査した当時に比べてライオンたちの群構成が高齢化しているとのことでした。これは、群れを仕切るなわばりオス（ひんぱん）に入れ替わることによる、新しいオスによる前なわばりオスのもうけた子殺し行動と、また地域の発展と人口増加に伴う、ブッシュミート（野生動物の肉）目当ての罠の増加がその背景にあるようでした。なわばりオスの高頻度の入れ替わりは、私の研究時にも問題で、これは狩猟管理区域で行われている大きなオス狙いのハンティングに起因するものでした。しかし後者の罠の増加は最近になって顕在化したもので、今後は地域住民への啓発活動も求められるでしょう。いずれにしても、今回得られた情報を企画展でより詳しく紹介すると同時に、この訪問を契機に、ZAWAや食肉類研究プロジェクトとの連絡を保っていきたいと考えています。（教育課 山崎晃司）



ルアンガア川本流とその周辺の河辺植生のようす



日没の行動開始を待つGPS首輪が装着されたメスの成獣ライオン

### トラザメ

「トラザメ」という名前から想像されるのは、トラのように獍猛で大きなサメかもしれませんが、実際には全長50cmほどの小型のサメです。体の模様と鋭い眼がトラにみえたことから、トラザメの名前がつけられました。日本各地でみられ、茨城県の沖合でも捕獲されます。水深50m～150mの深い場所に生息し、おもに、海底の小動物などを食べています。

当館ではこのトラザメを第3展示

室の海の水槽で展示しています。性格はおとなしく、丈夫で飼育しやすいサメです。

しかし、トラザメに餌を与えるのは意外に難しく、工夫が必要となります。ほかの魚が食べる量を計算しながら、トラザメにも十分行き渡るように、水槽の底に適量を落とすようにするのがいいです。またトラザメは嗅覚を使い左右に顔を振って餌を探し回るので、なるべく顔の近くに餌が落ちるように与えなければなりま

### おさかな通信

せん。ぜひ、トラザメが餌を探して一生懸命に泳ぎ回るようすを御覧ください。（水系担当 大森教弘）



トラザメ

## 博物館の標本を授業で使おう！～教育用資料貸出～

収蔵品紹介

皆さんは博物館をどのように利用していますか。展示をみて勉強したり、野外施設でのんびり散歩をしてお弁当を食べたり、家族でイベントに参加したりして楽しんでいるかもしれません。また、学校に通っている子どもたちは遠足で博物館に遊びに来たことがあるかもしれません。しかし、じつは博物館は、来館したお客様のほかにもさまざまな形で利用されています。

博物館には多数の標本がありますが、その一部を教育用資料として学校などの教育施設に貸し出しているのです。教育用資料として貸し出しているものは、動物、植物、地学に関する資料で、それぞれ実物の標本や拡大模型、その他に学習キットなどがあります。ここでは、その中の一部を紹介します。

まず1つ目は、「昆虫のスケッチ用標本」です。こちらは小学3年生の理科の学習に最適です。この標本は約10cm四方の透明なケースの中に本物の昆虫の標本が一匹ずつ入っているので、子どもたちは机の上でいろいろな角度から昆虫の標本を観察することができます。鮮やかな昆虫の色も間近で観察することができます。子どもたちに興味、関心をもたせるにはぴったりです。また羽や足の数、頭・胸・腹などの昆虫の体のつくりも確認できるのがポイントです。アクリル樹脂で封入した標本もあり、壊れにくく丈夫で小さな子どもでも安心して使用できます。茨城県では珍しいオオムラサキなどの貴重な昆虫の標本もあります。

2つ目は、「化石レプリカキット」です。これは、アンモナイトや三葉虫などの化石レプリカを作成するキットで、楽しく化石の勉強をすることができます。できあがった化石のレプリカに絵の具で思い思いの色をつけながら太古のロマンに思いをはせるのもいいですね。このキットは小学校高学年や中学校の理科の学習、学校のイベントなどで利用されることが多いです。

そのほかにも動物の骨格標本や植物の標本、化石、鉱物などの標本もあります。学校の理科の授業だけでなく、国語などの他教科や、各教育施設のイベントなどでも利用可能です。詳しくは当館のホームページ上からも御覧いただけます。学校の先生方など、ぜひ博物館ならではの資料を学習に生かしてみたいかがですか。  
(教育課 小泉直孝)



人気の「昆虫のスケッチ用標本」

## 中秋の名月

季節の話題

秋になり、野原にススキが目立つようになると頭に浮かぶのが「中秋の名月」ですね。旧暦では7月から9月までの3か月間が秋とされ、ちょうどその真ん中、旧暦8月15日の月を「中秋の名月」とよびます。今年は9月19日が中秋の名月です。日本では、ススキやハギなどの秋の野草を団子や芋とともに縁側に供え、お月見を楽しむのがならわしとなっています。

中秋の名月といえば満月を思い浮かべる人も多いと思いますが、中秋の名月が必ずしも満月であるとは限りません。旧暦は月の満ち欠けをベースにひと月を数え、新月のときを1日目として日付をカウントします。すると15日頃は満月に近い月がみえますが、実際は月の満ち欠けの周期は29.5日となっているので、新月から満月まではぴったり15日になりません。その上、月の軌道は楕円のため、新月から満月まで最短で13.9日、最長で15.6日かかります。そのため、年によって満月から1～2日ずれてしまうこともあります。今年は、9月19日が満月なので本当にまん丸な中秋の名月が楽しめることとなります。

窓を開けていても心地よいこの季節はお月見には最適なシーズンです。日本では月の表面の模様をウサギが餅つきをしているように見立てますが、世界各地では、片腕のカニ、ロバ、吠えるライオン、ワニ、ヒキガエル、女の人の横顔などさまざまな見方が伝えられています。さて、皆さんは何にみえますか。そのようなことを話題にしながら、満月をみてお団子をいただくのもいいですね。  
(資料課 諸橋靖子)



クレーターがよくみえる満月

## トピックス

### 〇8,000回ガイドツアーを迎えて

平成6年11月の開館と同時に始まった展示解説員（ミュージアムコンパニオン）によるガイドツアーが平成25年7月25日にめでたく8,000回を達成しました。ガイドツアー参加者の方々には、記念の集合写真が手づくりのフレームに入れてプレゼントされました。そのほかにも、8,000回記念オリジナル缶バッジや、館内の展示物に関するクイズを載せた特製リーフレットもプレゼントされました。

ガイドツアーの良さは、お子様から年配の方、またはじめてのお客様からリピーターの方まで、さまざまな層のお客様が展示室を興味深く見学し、楽しめるようになっているところです。さらに、ガイドツアーごとに内容が少しずつ違うので、何度参加しても新しい発見をすることができます。

ガイドツアーは、毎日午前10時、午後1時と午後3時の3回実施しています。ツアー途中からの参加もできますので、1か所だけ展示物についての解説を聞きたいという方にもお気軽に御参加いただけます。これからも、お客様と当館を結ぶ架け橋として、さまざまな情報を提供していきますので、当館へお越しの際には、ぜひ御参加ください。（教育課 潮田好弘）



記念の集合写真（2階第1展示室前にて）

### 〇カラー魚拓に挑戦

第58回企画展の関連イベントとして自然講座「カラー魚拓に挑戦」が7月20日に開催されました。カラー魚拓は、墨汁と和紙を使う白黒の魚拓ではなく、油性のカラーインクで化学繊維の布に色鮮やかな魚の姿を映し出す魚拓です。例えるなら、コインに紙をかぶせて鉛筆で上からこすると模様が浮き出てくる感じでしょうか。講師は埼玉県東松山市在住の山本龍香先生で、先生は長年、国内だけでなく海外でも「魚拓教室」や「個展」を開き、その普及に努めてきた方です。

本講座は、本格的なカラー魚拓を体験していただくため、対象は中学生以上、定員も20名としました。当日は、欠席者が出て参加者は14名になりましたが、その分、山本先生との距離が近くなり、いろいろなお話が聞

けたようです。今回、魚拓に使ったのは日本の溪流に生息するヤマメで、「パーマーク」とよばれる斑紋と薄いピンクが美しい魚です。午前中はヤマメを台座に固定し、布を貼るところまで行いました。午後から色づけを行い、講座が終わるときには、きれいなカラー魚拓が完成しました。（資料課 増子勝男）



カラー魚拓に挑戦中

### 〇挑戦！！朝から晩まで昆虫観察

8月3日に館内野外施設で、「挑戦！！朝から晩まで昆虫観察」というイベントを実施しました。今年は、子どもたちに「セミのめげがらを探そう」や「トンボを三角紙に入れよう」など15のミッションが書かれた指令書を配布して観察を行いました。ミッションクリアを目指し、暑いなか、子どもだけでなく、大人も童心に返って熱心に昆虫を追いかける姿が印象的でした。また、観察会の途中には採集した昆虫について、ボランティアの柄澤さんや山川さん、元当館職員の久松さん、ジュニア学芸員の広瀬君に話をしてもらいました。午後の暑い時間にはペーパークラフト作成、夜はホタルやライトトラップの観察など盛りだくさんの1日でしたが、ホタルの飛ぶ幻想的な光景をみると疲れも忘れてしまうようでした。当日は、多くのボランティアやジュニア学芸員の協力もあり、参加者の皆さんに楽しんでいただけたようです。来年も昆虫観察イベントを企画したいと考えていますので、ぜひ御参加ください。（資料課 中川裕喜）



ジュニア学芸員の広瀬君の話を真剣にきく参加者の皆さん

# 遺伝子のバトンをつないだ魚 -クニマス-



企画展で飼育・展示した西湖のクニマス



(提供：山梨県水産技術センター)

田沢湖産クニマス標本(国の登録記念物)(所蔵：仙北市田沢湖郷土史料館)

第58回企画展「ぎょ・魚・漁 - 淡水魚の知られざる生態を追って -」の最後のコーナー、第5部「追われ・守られ」では、山梨県西湖で採集されたクニマスから人工受精で生まれた幼魚を水槽で展示しました。

クニマスは、秋田県の田沢湖を自然生息地とするサケ科の淡水魚で、ヒメマスに近縁な日本固有種です。クニマスは田沢湖を唯一の生息地としていましたが、1940年に温泉水の混ざった強い酸性の玉川の水が田沢湖に導入されたことで、湖の水質が大きく変化し、絶滅しました。

2010年12月15日、「70年ぶりに生きたクニマス確認！」のニュースに多くの方が驚きました。絶滅したと思われていたクニマスが山梨県の西湖で生き残っていたのです。陸や空はもちろん海も移動できないクニマスが、なぜ、田沢湖から約500kmも離れた西湖にいたのでしょうか。謎は、1935年に西湖の漁業協同組合が田沢湖の漁業協同組合よりクニマスの発眼卵(卵の中で眼ができた状態)10万粒を購入したことを記した当時の帳簿

や荷物受領証、葉書などの存在によって解かれました。田沢湖から送られた10万粒の一部が西湖に定着し、絶滅したと思われていた期間、遺伝子をつなぎ続けていたのです。

企画展では、多くの機関の協力により、日本に残る14個体の田沢湖産クニマス標本のうちのひとつで秋田県仙北市田沢湖郷土史料館が所蔵する標本(国の登録記念物)に加え、田沢湖から西湖に発眼卵が送られたことを伝える約70年前の荷物受領証や葉書、そして水槽で飼育・展示したクニマスの親魚の標本なども展示することができました。(資料課 増子勝男)

## 編集後記

今年の夏は全国各地で最高気温を更新するなど、とても暑い夏となりました。ゲリラ豪雨などもあり、自然が猛威を振るうように、地球環境が徐々に変化しているのかと心配になってきます。10月からは茨城県の大地の成り立ちを紹介する企画展がはじまります。身近な自然のしくみについて知ることから、自然環境についても考えるきっかけになるのではないかと思います。(Y.U)

## 交通案内



## ＜車ご利用の場合＞

- 常磐自動車道谷和原ICから20分
  - ＜鉄道・バスご利用の場合＞
  - つくばエクスプレス、関東鉄道常総線守谷駅下車～関東鉄道バス「岩井/バスターミナル行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
  - 東武野田線愛宕駅下車～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩10分
- ※事前に発車時刻等をご確認ください。



## 【開館時間】

9:30から17:00まで(入館は16:30まで)  
※ペット、遊具、テブル、椅子及びテント等のお持ち込みはご遠慮ください。

## 【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設のみ	年間パスポート
	企画展開催時	通常時		
一般	720円 (580円)	520円 (420円)	200円 (100円)	1,500円
高校・大学生	440円 (300円)	320円 (200円)	100円 (50円)	1,000円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	300円

(注):( )内は団体料金(20名以上)

未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。次の日は入館料が無料です。

- 5月4日(みどりの日) ●6月5日(環境の日)
- 11月13日(茨城県民の日) ●3月21日(春分の日)
- 高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日(ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。)

## 【休館日】

- 毎週月曜日
- ※9月16日(月)、9月23日(月)、10月14日(月)、11月4日(月)、12月23日(月)は開館し、翌日が休館となります。
- ※12月28日(土)～1月1日(水)は、休館となります。

